

# 青衣童女像

寺田寅彦

青空文庫



木枯らしの夜おそく 神保町じんぼうちょうを歩いていたら、版画と額縁を並べた露店の片すみに立てかけた一枚の彩色石版クロモリソグラフが目についた。青衣の西洋少女が合掌して上目に聖母像を見守る半身像である。これを見ると同時にある古いなつかしい記憶が一時に火をつけたようによみがえって来た。木枯らしにまたたく街路の彩燈にしきの錦の中にさまざまの幻影が浮かびまた消えるような気がするのであつた。

十四五歳のころであつたかと思う。そのころ田舎いなかでは珍しかった舶来の彩色石版の美しさにひどく心酔したものであつた。われわれはそれを「油絵」と呼んでいたが、ほんとうの油絵というも

のはもちろんまだ見た事がなかったのである。この版画の油絵はたしかに一つの天啓、未知の世界から使者として一人の田舎いなかしやう少年ねんの柴しばの戸ねんぼそにおとずれたようなものであつたらしい。

当時は町の夜店に「のぞきからくり」がまだ幅をきかせていた時代である。小栗判官おぐりはんかん、頼光らいこうの大江山鬼退治おおえやま、阿波の鳴戸あわ、なるとさんなるとしょうなるとだなるとゆうなると三なると荘なると太夫なるとの鋸のこぎり引きび、そういつたようなものの陰惨やみにグロテスクな映画がおびえた空想の闇やみに浮き上がり、しやがれ声をふりしぼるからくり師の歌がカンテラのすすとともに乱れ合つていたところの話である。そうして東京みやげの「江戸絵」を染めたア  
ニリン色素のなまなましい彩色がまだ柔らかい網膜を残忍にただ  
らせていたころの事である。こういうものに比べて見たときに、

このいわゆる「油絵」の温雅で明媚な色彩はたしかに驚くべき発見であり啓示でなければならなかった。遠い美しい夢の天国が夕ばえの雲のかなたからさし招いているようなものであった。

当時の自分のこの「油絵」の貧しいコレクションの中には「シヨンの古城」があった。それからたしかルツエルンかチューリヒ湖畔の風景もあつた。スイスの湖水と氷河の幻はそれから約二十年の間自分につきまとっていた。そうしてとうとう身親しくその地をおとずれる日が来たのであつたが、その時からまたさらに二十年を隔てた今の自分には、この油絵のスイスト、現実に体験したスイストの間の差別の障壁はおおかた取り払われてしまつて、かえつて二十年前の現実が四十年前の幻像の中に溶け込むように

も思われるのである。

ナポリの湾内にイタリアの艦隊の並んだ絵も一枚あった。背景にはヴェスヴィオが紅の炎を吐き、前景の崖がけの上にはイタリア笠かさ さまつ松が羽をのしていた。一九一〇年の元旦がたんにこの火山に登つて湾を見おろした時には、やはりこの絵が眼前の実景の上に投射され、また同時におうがい鷗外の「即興詩人」の場面がまざまざと映写されたのであった。

静物が一枚あった。テーブルの上に酒びん、葡萄酒ぶどうしゆのはいつたコップ、半分皮をむいたみかん、そんなものが並んでいた。そしてそれはその後に見た現実のあらゆるびんやコップや果くだも物ものよりも美しいものであった。すべてがほの暗いそうして底光

りのする雰囲ふんいき気の中から浮き出した宝玉のようなものであった。

そうしてそのほかに一枚青衣の少女の合掌した半身像があった。これは両親と自分との居間の楣間びかんに掲げられたままで長い年月を経た。中学の同級生のうちで自分がこういう少女像の額なんか掛けているのをおかしいと言って非難するものもあつた。十九の年に中学を出てから他郷に流りゅうぐう寓うした。妻を迎えて東京をあつちこつちと移り住んだ。その間に年に一度ぐらい帰省するそのたびにこの少女像は昔のままに同じ楣間びかんに同じ姿勢のままに合掌して聖母像を見守つていたのである。

父がなくなつてから郷里の家をたたんだ時にこれらの「油絵」がどうなつたか。不思議なことにはこれに関する自分の記憶が全

く空白になっている。事によると自分が家の始末に帰る前にもう取り片付けに着手していた母の手で何かといっしよに倉の中へしまい込まれて今でもどこかに自分の所有物として現存しているのか、それとも雑品の中に交じってくず屋の手に渡ってしまったのかもしれない。郷里の家は人に貸してあるので、たまたま帰省しても、締め切ったままの座敷倉へはいる機会はまれである。のみならずこれらの絵の事は実際にもう長い間自分の識域の底深く沈んでいたのであった。神田かんだの夜店の木枯らしの中に認めたこの青衣少女のドッペルゲンガー重像はこのほとんど消えてしまっていた記憶を一時に燃え上がらせた。少女は四十年前と同じ若々しさ、あどけなさそのままに保存してエメラルド色のひとみを上げて壁間の

聖母像に見入っているのである。着物の青も豊ほうぎよう 頬ようの紅も昔よりもかえって新鮮なように思われるのであった。

ただ一瞥いちべつを与えただけで自分は惰性的に神保町の停車場まで来てしまった。この次に見つけたらあれを買って来るのだと思いついた時には、自分をのせた電車はもう水道橋すいどうばしを越えて霜夜の北の空に向かって走っていた。昔のわが家の油絵はどうなったか、それを聞き出す唯一の手がかりはもう六年前になくなった母とともに郷里の久万山くまやまの墓所の赤土の中にうずもれてしまっているのであった。

その後おりおり神保町の夜店をひやかすようなときは、それとなく気をつけているが、この青衣少女にはめぐり会わない。夏が

やって来た。夕方浴後の涼風を求めて神田の街路をそぞろ歩きするたびにはこの「初恋」の少女の姿を物色する五十四歳の自分を発見して微笑する。そうしてウエルズの短編「壁の扉とびら」の幻覚を思い出しながら、この次にいついかなる思いもかけぬ時と場所で再びこの童女像にめぐり会うであろうかという可能性を、さじの先でかき回しながら一杯の不二家ふじやのコーヒ―をすするのである。

(昭和六年九月、雑味)

# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第三卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年4月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第64刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 青衣童女像

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>